

1. 佐倉市にはいつ頃、入居しましたか。

- ・旧来からの住宅地に隣接して開発造成された街区に、平成 6 年に移り住みました。
中志津に住んでおよそ 30 年になります。

2. 佐倉市に入居して、どのように感じましたか。

- ・自宅周辺は、里山や谷田が広がり、カエルが鳴きバツが飛び交うという自然色豊かな環境であり、就職して上京するまで生まれ育った故郷によく似た自然環境だと感じました。

3. 川口様は、佐倉道を歩き学習するボランティアガイドや佐倉学の講師をしていますが、そのきっかけは何ですか。

- ・50 年余り首都圏へ通勤してきました。多くのみなさんと同じように毎日、電車の窓から外の景色を眺めながら、佐倉と東京の間を往復するだけでした。
また、車で外出した時も、運転しながら途中の景色を眺めることはあっても、停車してじっくりと観覧し、沿道の史跡を知る機会はなかったように思います。
- ・長年、佐倉に住みながら佐倉のことを知らなかったことに気づき、平成 30 年 12 月～翌年 2 月に開講された、志津公民館主催の「佐倉道を学ぶ」講座を受講しました。なんとなく眺めていた景観や史跡などは、それぞれ先人が生きてきた願いを込めて創建、建立され、今日まで連綿と伝えられている文化であり、自分に身近な文化と触れることは大変興味深く楽しいものでした。また、このような地元の文化を多くの市民の皆さんに理解してもらおうと同時に、後世に長く伝えていくことが大切だと感じたのがきっかけになっています。
- ・その後も引き続き有志グループにより調査活動等を展開しながら、毎年、志津公民館が主催する「佐倉道を歩く」講座で市民の皆さんの案内をやっています。NHK 番組「ブラタモリ」の佐倉道版のような散策で楽しいですよ。

4. 志津地区には、どのような遺跡があるのですか。

- ・京成電車線路で分断されている感じがありますが、北側、南側を併せて志津地区とされています。
- ・標高 20～30m の下総台地にあるこの地区は、古くは鹿取の海の一部（入り江）でもあった印旛沼に近接していました。このため、汽水に生息する貝の貝塚や縄文期の土器、住居跡などが発掘され、古代の人々の生活の跡が確認されています。また、その後の時代に築造された多くの古墳も確認されています。
- ・中世から近世にかけて本佐倉城や佐倉城（鹿島城）を拠点として武家社会による地域支配が行われてきましたが、人々はたくましく生活を繋いできており、小田原や武蔵と佐倉との間をつなぐ街道が開かれ、沿道の各地には多くの寺社が創設され、石造物などが残されています。
また、「物」ではありませんが、地域の祭りや伝統的な行事等も受け継がれてきています。
- ・このような志津地区の遺跡や文化については、先輩諸氏のご尽力により調査・記録されており、いずれもその時代における人々の願いを込めて作られ残されてきているものです。

5. 佐倉道と成田道の違いは何ですか。

- ・古くから佐倉と小田原、武蔵を繋ぐ道筋がありましたが、幕府が参勤交代の道筋として、佐倉、船橋、八幡、小岩市川の関所、新宿（水戸街道との分岐点）のルート決めました。しかし、人々は小岩市川の関所から江戸までをほぼ直線的に繋ぐ道筋（元佐倉道）を利用したり、日本橋と行徳の間は小名木川、新川を利用した船を利用していました。
- ・成田山の布教活動や市川團十郎の成田山帰依、当時の寺社参詣に併せた庶民の旅行ブームなどの影響もあって江戸庶民の成田参詣が盛んになると、佐倉道は安永年間（1770 年代）から成田道と呼ばれるようになり、「成田道、元の名前は佐倉道」となりました。

6. 道標を調査することで何が分かるのでしょうか。

- ・現代の道路標識は、都道府県公安委員会や道路管理者等の公的な機関が設置していますが、近世から明治期に設置された道標は、徒歩で旅する旅人のために、集落、信仰集団や篤志家（商家）などの民間人が願いを込めて設置しました。道標は道の分岐点などに建てられ、その四角柱の四面には、目的地への道筋、距離や建立者の集団名、氏名などが刻まれていますので、当時の道筋や社会的事情などを伺い知ることができます。

ただし、時代の変遷とともに設置位置が移動されていることがあるので注意が必要です。

7. 成田街道は成田山へ参詣に行く人々が通った道だと思いましたが、実際に現在の 296 号を通ったのでしょうか。

- ・沿道の史跡の位置から考えると、小岩市川の関所（江戸川）を通過してからは、おおむね現在の国道 14 号を歩き、船橋からは国道 296 号を通ったと考えられます。臼井地区は手繰川を渡って手繰坂を登り、臼井城の前を通過して臼井宿に出る道筋であったので、現在の国道 296 号とは大きく異なります。また、佐倉新町を通過して、酒々井から成田山までは国道 51 号に沿った旧道を歩いていました。

8. 江戸の市街から成田に至る街道として、どの道を通り、何日くらいで成田まで歩いたのでしょうか。

- ・元佐倉道などの街道を歩いて行く場合、日本橋から行徳まで船を利用する場合など、経路は様々ですが、一般的には江戸から成田までの行程は片道 1 泊 2 日と言われています。宿泊は船橋、大和田、酒々井などにある宿場が利用されましたが、成田山到着（泊）の朝早く護摩供養、などの参詣を済ませ帰途につきました。帰途、船橋などで「精進落とし」と称して旅を楽しむことも多かったようです。

9. 佐倉が印旛沼に面していることで、どのような影響を受けてきたのでしょうか。

- ・古くから水産資源、水資源などとして生活と深くかかわってきましたが、1600 年代半ばの徳川幕府による江戸湾に流れていた利根川を銚子から太平洋に流れるように付け替えるという「利根川東遷事業」によって洪水に悩まされることになり、昭和 44 年（1969）の水資源公団（当時）による水道

用水、農業用水、工業用水の確保と治水事業の完成までおよそ 300 年間続きました。

- ・堤防をかさ上げ、水深を深くして貯水量を増やした印旛沼は、流域の河川や陸域からの流入水による有機負荷を外へ排出しきれず、湖沼内での浄化を簡潔しきれず、湖沼における内部生産も加わって全国的にトップクラスの汚れた（COD 値の高い。）湖沼になってしまっており、官民一体となった改善対策への取り組みが続けられています。

10. 佐倉には、佐倉城や臼井城だけではなく多くの城があったとのことですが、現在まで、判明している城、城跡は幾つくらいあるのでしょうか。

- ・調査資料が十分でなく諸説ありますが、地元を支配していた豪族の居館として、また、臼井城の出先となる砦として、土塁などの城跡跡が残されている志津城（上志津）、上峠城（下志津）、小竹城（小竹）が報告されています。

11. 佐倉市の歴史を見ますと四街道市との間で地区の編入等の地域移動がありますが、このような移動の背景にはどのようなことがあったのでしょうか。

- ・幕末、佐倉藩領であった志津地区の南側に、佐倉藩が大砲試射場を造りました。明治 6 年、政府は、フランス軍人を教師に招き、佐倉藩の大砲試射場を射的場として活用するとともに、同 19 年に、「陸軍砲兵射的学校」を下志津原に創立しました。同 30 年に四街道に移転しましたが、現在、学校跡には記念碑が建てられています。

日清戦争後の軍備強化、演習場の拡大によって下志津他の民間所有地は国に買収されました（演習場地域の旧字名が消滅）。

- ・なお、明治 22 年の町村制施工の際、南部の「下志津新田」の一部は千代田村に分割編入され、内黒田村の飛び地「今宿」は志津村に編入されています。
- ・昭和 25 年、旧演習場が開拓団が入植して国有地が払い下げられ、当時の上・下志津原は南部が四街道千代田地区となり、北部は上・下志津原に戻りました。

このように、国有地である軍の演習場として拡大され、廃止されてきた過程で土地所有者や利用者が変わり、字名や所属市町村が変遷してきたものと考えられます。

12. 中志津は、角栄団地が出来る前は、どのような地域だったのでしょうか。

- ・明治 10 年代に日本陸軍が測量、作成した地図によれば、ほとんどの地域に「松林」の表示がされています。

昭和 39 年に、上志津の大山（現、中志津 1 丁目）から「角栄団地」の開発整備が着手されましたが、そのころの様子として「田んぼと畑作地と樹木の多いところであった。」との記録があります。また、中志津辺りの字名は「中野」でしたが、これは広大な台地の真ん中であつたから付けられた名前とみられています。

さらに、昭和 52 年に住民投票により、住居表示が「中志津」、「丁目」、「番地」という現在の表示方式に改められました。

13. 川口様は防災の事に関しても詳しいですが、関心を持った理由を教えてください。

・東日本大震災の被害現場に入り、震災・津波被害のすさまじさを実感したこと、自然災害の発生は予知できず、制御できないので、被害をできるだけ小さくするためには自分自身が努めるしかないと思い、講演や資料などの情報を収集して自分なりに取り組んできたところです。

14. 地理的に中志津において特に備えが必要な災害として何が考えられるでしょうか。

・一人ひとりが置かれた環境は様々であるため、それぞれがどのような災害にどの程度備える必要があるかについて考え、対処することが基本であると考えています。

・一般的に、中志津において発生可能性がある自然災害は、地震と強風（突風・竜巻）による災害が考えられます。近隣の排水溝の溢水・浸水はあっても河川洪水が起こる可能性は低いといえるでしょう。

15. 大きな地震が発生した際には、どのような行動が必要でしょうか。

・遠くない日に大きな地震が発生することが予測（国の地震調査研究本部・地震調査委員会の発表によれば、南関東で発生する M7 程度の地震の今後 30 年以内の発生確率は 70%程度）されていますが、それが何時かわからないので、日頃から備えをしておくしかありません。自分や家族が、家屋や家具による被害を受けないよう対策を講じておくことが必要であり、具体的には市等からの情報にあるように、家屋の耐震診断、補強、家具転倒防止などが必要です。

・また、上下水道、電気・ガスなどのライフラインが途絶し、復旧には時間がかかるかもしれません。市役所関係者や防災会員も同じ被災者となってしまいます。公的避難所の開設には時間を要しますし、収容スペース等からみれば大変厳しいものとなるでしょう。

そこで、在宅非難を基本に考える必要がありますので、そのためにも市等からの情報にあるように、当面、必要な水、食料、日用品等を必要量確保しておくべきでしょう。

16. 佐倉学を通して、どのような事が最も印象に残っていますか。

・私たちの祖先がこの地域で歴史を繋ぎ、その時々願いを込めて残してきた史跡などは、次世代に繋いでいかなければならない地域財産であるとの感を強くしました。

17 今後、佐倉学のテーマとしたいことがありましたら教えてください。

・地域の人々からも忘れ去られ、朽ちてしまいかねない史跡等について。その内容を調査し、広く紹介していくことによって地域の人々の関心を深め、更には地域活動の発展に貢献することができればと考えています。